

【一】 次の文章は谷川俊太郎の詩を論じています。読んであとの問に答えなさい。

なぜ谷川の作品はわかりやすいのか。それを例をあげながら順番に確認していきましょう。まず次の詩を読んでみてください。

おならうた

いもくつて ぶ
くりくつて ぽ
すかして へ
ごめんよ ぽ
おふろで ぽ
こつそり す
あわてて ぶ
ふたりで びよ

言うまでもなくこの詩のわかりやすさは、言葉の平易さからきています。わかりやすい語と単純な構文だけで書かれていて漢字もなくぜんぶ平仮名だから、小さな子供や日本語にそれほど詳しくない非日本語圏の人でもわかるでしょう。しかもごく短い。これなら集中力ももつ。

もちろんリズムも大事です。音読してみればわかるように、「いもくつて、ぶ！ くりくつて、ぽ！」という進行感はずいぶん速く、覚えようとしなくてもいつの間にか覚えてしまうほど、こちらの舌や口や手足ともなじみがいい。頭でわかる前に、まず体が言葉をわかつてしまう。

しかし、①それだけででしょうか。「わかる」というのは意外とやつかいなことです。人間というのは面倒くさい生き物で、簡単ならわかるというものではない。簡単すぎてかえってわからないということもある。そのことを確認するために、ちよつとした実験をしてみましょう。たとえば、この「おならうた」が次のように書かれていたらどうでしょう。よりわかりやすくなるでしょうか？

いもくつて ぶ
いもくつて ぶ
いもくつて ぶ
いもくつて ぶ
いもくつて ぶ
いもくつて ぶ
いもくつて ぶ
いもくつて ぶ

言葉の種類がより少ないからより簡単になったかという点、そんなことはない。おそらく「おならうた」というタイトルの詩がこのようなものであったら、多くの人は「よくわかんないなあ」という感想を持つのではないでしょうか。

でも、こんなに簡単な言葉で書かれているのに、どうして「よくわかんないなあ」なのでしょう。おそらく「よくわかんないなあ」とつぶやく人は、「それで？」という思いを持っているのです。つまり、この偽の「おならうた」には「それで」が欠けている。もう少し平たい言葉でいうと「おち」や「イミ」がわからない。何を読んだかがわからない。

ひるがえって谷川俊太郎による本物の「おならうた」を見てみると、たしかに「おち」や「イミ」は豊富です。もつとも目につくのは最後の「ふたりで びよ」というところでしょう。それまでの「ぶ」「ぽ」「へ」「ぼ」「す」「ぶ」は、まあ、「おならはこんな音がするものだ」という私たちの予想の範囲におさまるものです。でも、②最後の「びよ」だけはちよつとちがう。「びよっていいかなあ？」と思わせる。でも、ひよつとするとそういう音が聞こえるかもしれない。ある種のおならは「びよ」かもしれない。あるいはふたりでいっぺんにおならをすると共鳴するということもあるのでしょうか。それとも、ふたりでいっぺんにおならしてしまつて、びつくりして「びよ」となるのか。「げ」「あら」「どき」というような、いわば心理の音が「びよ」なのかもしれない。いや、仲のいい友達や恋人同士が親密な空気の中にいると、どんな音も「びよ」というかわいらしい響きに包まれてしまうのかもしれない。

……なんていうことを考えるだけで私たちはすでに詩人の術中にはまっています。谷川は「おち」の達人です。いろんな技をもっています。とりわけ彼がすごいのは、通常の「謎を提示してそれを解決してみせる」という「おち」の型とはひと味ちがう形で落としどころをつくれること、それから、目にもとまらぬスピードで「おち」をつけられることです。この「おならうた」でもその辺がとてうまく行われています。

その③メカニズムをもう少し詳しく確認してみましょう。「いもくつて ぶ／くりくつて ぽ……」という連続を読んでいくうちに、いつの間にか私たちは「自分」という枠をこしらえてしまいます。それはこういうことです。みなさん同意してくだ

問一 傍線部①「それだけでしょうか。」とありますが、「それ」の指す内容としてあてはまらないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 軽快なリズムで進行して体にしつくりくるということ。
イ 非日本語圏の人にも発音しやすい音であるということ。
ウ 理解しやすい言葉だけで詩を形成しているということ。
エ 文の組み立てがわかりやすく、そして短いということ。
オ 詩で使われている言葉がすべてひらがなだということ。
カ おならというテーマが身近で親しみやすいということ。

問二 傍線部②「最後の『ぴよ』だけはちよつとちがう。」とありますが、どういふことですか。六十字以内で答えなさい。

問三 傍線部③「『ふたり』という語の意外性」とありますが、なぜ意外なのですか。

問四 傍線部④「仕掛け」とありますが、ここで言う「仕掛け」とはどのようなものですか。

〔二〕 次の文章を読んであとの問に答えなさい。

幼くして両親を亡くした「あたし」（サマー）を引き取り、大切に育てたオブおじちゃんとメイおばちゃんは、深い愛情で結ばれていた。しかし、六ヶ月ほど前の夏、おばちゃんは庭で植物の世話をしている最中に亡くなってしまう。おじちゃんは最近、おばちゃんの気配を感じると言い始め、「あたし」の同級生（中学一年生）であるクリータスと意気投合するようになった。クリータスには、亡くなった祖父の存在を感じ取った体験があり、その話を聞いたおじちゃんは、おばちゃんからのメッセージを翻訳してもらうために、後日クリータスを庭へと連れ出した。以下、問題文は三人が冬枯れの庭に立つ場面から始まる。

あたしはおばちゃんが現れるなんてこと、①それほど期待してたわけじゃない。だけど、おじちゃんはものすごくいれこんでたし、奇跡がおきるにちがいないって本気で信じてた。だから、あたしも心のかたすみでほんの少しだけ思った。もしかしたらおばちゃんのやさしい魂が天国から舞いおりてきて、あたしたちのところにくるんじゃないかって。おばちゃんは生きてたころ、ぜったいにあたしたちをがっかりさせることがなかった。いてほしいって思うところにはかならず現れた。おばちゃんは期待をうらぎらないっていう思いがあったから、②あたしたちは、奇跡がおこるんじゃないかって希望をもてたんだと思う。

クリータスがどう思ってたのかはわからない。クリータスがだまって静かにしてるのをみたのは初めてだった。おじちゃんはひとりでしゃべったり説明したりしながら、ママやブロッコリーの枯れた茎が残ってる庭を歩きまわっていた。そしてクリータスは、小さい子みたいにおじちゃんについて歩きながら、会ったこともない女の人の魂をさがし求めてた。

きつと、おじちゃんはこう考えたんだと思う――おばちゃんが大事にした庭でおばちゃんのことを話して、なにも知らないクリータスにおばちゃんの姿をえがいてみせれば、超自然的な力が庭にあふれて、おばちゃんがひきよせられてくるんじゃないかって。うわさをされるとくしゃみが出るっていうじゃない。おじちゃんは、そんなような力をひきおこそうとしたんだと思う。

そんなわけで、あたしたちはポケットの奥に手をつつこんでたっていた。おじちゃんはクリータスをみつめ、クリータスは空をみあげ、あたしは地面をみつめてた。おじちゃんは、メイおばちゃんがどんなにすばらしい奥さんだったか、それから、おばちゃんがあたしたちにどんなにやさしくしてくれたかを話した。おじちゃんががした思い出話に、あたしはちよつとびっくりした。もつとすごいことを話してきかせるんだらうって思ってたからだ。たとえば、おばちゃんがこつそり三年間もお金をためて、高価なのこぎりを買ったこと。そののこぎりは、おじちゃんが（注）シアーズの通信販売のカタログでみて、とつてもほしがってたものだ。でなければ、あたしが水ぼうそうにかかったときのこと。死んだほうがましだって思うくらい苦しくて、うわごとをい

いつづけてたあたしを、おばちゃんは三十二時間ぶつとおして看病してくれた。クリータスに、そういうすごいことを話してきかせるのかと思つてた。

だけどおじちゃんは、そういうかつこいことじゃなくて、ずっとささいなことを選んで話した。たとえば、おじちゃんの不自由なひざにぬり薬をぬって毎晩毎晩さすつたこと。次の朝起きたときにその足がよくなつてくるかもしれないからつて、おばちゃんはひと晩もかかずにさすつたのだ。それから、あたしがまだ小さかつたころ、おばちゃんが家事の合間に窓から顔を出しては、ぶらんこで遊んでるあたしに、「かわいいサマーちゃん、世界じゅうでいちばんいい子ちゃん」って声をかけたこと。（このことは、おじちゃんの話をきくまで、すっかり忘れてた）それからおじちゃんは、いろんなことをひきあいに出して、おばちゃんがどんなにやさしかつたかをきかせた。おじちゃんがこういうできごとのひとつひとつを思い出の中で大切にしていって、なんとかまたそのやさしさにふれたいつて思つてることが、よくわかつた。

クリータスは空をじつとみてたけど、ときどきおじちゃんのほうをちらつとみてうなずいた。話をちゃんときいてるよつて、態度で示してるのだ。クリータスがかぶつてゐる帽子には、毛皮もどきの耳おおいがついてた。まるでスヌーピーの耳みたい。あの耳おおいをばたきさせたなら、スヌーピーみたいに宙にうかぶんじゃないかな。クリータスが庭を横ぎつて飛んでくるところを想像したら、おかしくてくすくす笑つてしまひそうだつた。

だけど、クリータスの帽子はお行儀よくじつとしていたし、クリータスもしんぼう強くじつとたつたまま、おじちゃんに話したいだけ話をさせていた。あたしたちはまるで、お葬式をしてるみたいな雰囲気につつまれてた。庭の冷たい土にかわいがつてたペットを埋葬したところつて感じ。そして、③どういうわけかこのときのほうが、おばちゃんのほんとお葬式のときよりもつとしみじみとして、本物らしく思えた。

外部の人たち、たとえば葬儀屋さんや牧師さんがいつたん入ると、残された家族の悲しみが型にはめられてしまふように思える。ちやうど、映画館に入る人たちがみんな同じように並んでたり、病院の待合室で待つてゐる人たちが同じようにすわつてたりするのと似てる。おばちゃんを失つたとき、おじちゃんとあたしがしたかつたのは、（注）トレーラーハウスの中でおたがいにしがついて何日も何日も泣くこと、ただそれだけだつた。だけど、そんなふうにはできなかつた。なぜつて、結婚するときや教会にいくときや子どもを育てるときにふつうはこうするつていうやり方があるのと同じように、悲しむときにもふつうはこうするつていうやり方があるからだ。

おばちゃんが死んだとき、おじちゃんとあたしは、事務的なことは葬儀屋さん、宗教的なことは牧師さんと話さなきゃならなかつたし、大勢の親類やそれまで会つたこともなかつた人たちと、こまごまとした打ち合わせをしなきゃならなかつた。そういうつた人たちがつくつてくれた食事を食べ、だまつて肩を抱かれてなきゃならなかつた。悲しみのあまりおかしくなつてやしな

いかと、みんながあたしたちの顔をみつめるのを、ただみてなきゃならなかつた。

おばちゃんのお葬式は、ちよつとのあいだ、④おじちゃんとあたしを社交界の名士みたいにしてしまつた。それで、あたしたちは髪をかきむしつて泣きわめくなんてできなかつた。まわりの人たちが、ふつうのやり方で悲しむことを望んでたからだ。

そんなわけで、ふきつさらしのなにもない庭にたつて、おじちゃんが思い出話の中でおばちゃんをよみがえらせてるのをきいてると、今まで欠けていたなにかがそそぎこまれるような気がした。お葬式のときからずつと欠けてたなにかが。そして、思つてもみなかつたことだけど、クリータスがあたしたちの求めてた役割、つまり葬儀屋さんや牧師さんや親類の人たちにしてほしいつて思つてた役割を果たしてた。そう、クリータスはんぺきになぐさめ役をやつてのけたのだ。つまり、クリータスはおじちゃんのひと言ひと言に耳をかたむけて、自分のぶあつい唇はきつちり閉じていたのだ。クリータスには特別な能力がいくつかそなわつてゐるつてことがだんだんわかつてきてたけど、自分がしゃべるべきときと、そうでないときとを知つてゐるつてことも、そのひとつなんだろうなつて思つた。

とうとう、ほめたいだけおばちゃんのことをほめつくしてしまうと、おじちゃん口を閉じてだまつた。おじちゃんもクリータスと同じように空に目を向けた。あたしも思わず同じように空をみつめた。黒いカラスが一羽頭の上を飛んでいつたほかは、なにもみえなかつた。おじちゃんの荒い息づかいと、鼻が出はじめたクリータスがときどき鼻をすすりあげる音以外は、なにもきこえなかつた。

おじちゃんがじつとたちつくしているあいだ、クリータスもあたしもじつとしてた。しばらくして、おじちゃんが頭をあつちに向けてたりこつちに向けてたりしはじめた。まるでラジオのつまみを合せてるみたいだつた。そして、ついにおじちゃんが大きなため息をついたので、おばちゃんがこなかつたんだなつてわかつた。おじちゃんはつかれきつた様子で首をふると、あたしたちから離れて、からつぽのトレーラーハウスに向かつて歩いていつた。

おじちゃんが坂をのぼつて歩いていき、トレーラーハウスの玄関に入るのをあたしとクリータスはみていた。それから顔をみあわせて、あたしたちもため息をついた。ふたりともがっかりしてた。

「このままじゃ、おじちゃんは病気になるか、頭がおかしくなつちゃうわ」ふいに、のどに大きなかたまりがつつかえたような気がした。なんだか目もじわつとしてきたみたいだ。

クリータスは肩をすくめて、独特の不思議な笑みをうかべた。

「少なくともオプおじさんには、やるこゝろができたんだ。朝ベッドから起きようつて気にならせるようなことがさ」

あたしは首をふつただけで、なにもいわなかつた。あたしがどんなに傷ついてるか、クリータスには知られたくなかつた。あたしじゃだめだつたんだ。おじちゃんを元気づけることはできなかつたんだ。おばちゃんがいなくなつても、おじちゃんにはま

だ愛情をそぐ相手が残されてるっていうのに、そう、このあたしがいるっていうのに、それじゃだめだったんだ。
クリータスがあたしをみた。

「オブおじさんがメイお婆さんの気配を感じたこと、君は信じてないんだろ？」まるで、あたしがなにか悪いことでもしたっていうような口調だった。

あたしはクリータスをにらみつけた。

「なんで？ あたしが信じようと信じまいと、あなたにどんな関係があるっていうのよ？」

クリータスは肩をすくめた。

「べつに。ただ、君にはもつと想像力があるのかと思ってただけさ。(注3)物書きつてのはそうだろう」

「あたしは物書きなんかじゃないわ」

「ちえつ、そうだろうとも」クリータスがものすごくいらしているのが、顔つきからわかった。

「クリータス、お説教するのはやめてよ」わめくか、泣きさけぶかしてしまいそうな気がしてきたけど、どっちもしたくなかった。とにかく非難がましい口調でしゃべるのをやめてほしかった。

クリータスは目をそらして、森のほうをみた。

「⑤……メイお婆さんのおかげだな」クリータスが、わかりきったことだっていうようにいった。

あたしは体をぴんとのばした。

「えっ？ なにがお婆ちゃんのおかげなのよ？」

クリータスはしやがむと、ブロッコリーのかわいた葉をいじった。

「おじさんがつくる(注4)風舞はさ、ぼくたちがみて、ぼつとわかるようなものじゃないよね。子犬とか子ネコとかをつくらないだろ。なぜかっていうと、おじさんは実際に目にみえるようなものには関心がないからだよ。庭のかざりをつくる気なんてないのさ。おじさんは芸術品をつくってるんだ。なぜおじさんが風舞を庭におかないのか、わかるよ。隣近所を楽しませようなんて思っないからさ。」

ぼくは思うんだけど、メイお婆さんはおじさんの豊かな想像力を受け入れてたんだよ。おじさんが思うぞんぶん才能を発揮できたのは、お婆さんのおかげさ」

クリータスはあたしの顔を見あげた。

「サマー、おじさんには実際にはみえないものをみる力があるんだよ。君にもね。ただ、君はいつもそれを追いはらおうとしてるけど」

クリータスがそういったとき、⑥あたしは、まいった！ っと思った。このさきどんな競争にも勝てないような気がした。クリータスのどこがあんなにきらいだったのかさえ、わからなくなった。クリータスの前にたつてることさえできなかった。

(シンシア・ライラント作 斎藤倫子訳『メイお婆ちゃんの庭』)

(注1) シアーズ アメリカ合衆国の百貨店。カタログによる通信販売で知られていた。

(注2) トレーラーハウス 自動車につないで運ぶことのできる、生活するための設備を備えた住居。

(注3) 物書きつてのは…… 本文より前の箇所(注4)に「あたしがいつも、レイシー先生から作文をほめられてる」という記述がある。

(注4) 風舞 「訳者あとがき」によれば、「原文では whirling という言葉で『くるくる回るもの』のこと」。

「動物の手足や翼の根元のほうに風を受けるための羽根がついていて、この羽根が風を受けると、手足や翼がくるくる回る仕組みになってい」る。

問一 傍線部①「それほど期待してたわけじゃない。」、傍線部②「あたしたちは、奇跡がおこるんじゃないかって希望をもてたんだと思う。」とありますが、「あたし」が「お婆ちゃんが現れる」ことを「期待してたわけじゃない」のに、「奇跡がおこるんじゃないかって希望をもてた」のはなぜですか。

問二 傍線部③「どういうわけかこのときのほうが、お婆ちゃんのほんとお葬式の時よりもっとしみじみとして、本物らしく思えた。」とありますが、それはお葬式の時二人がどうだったからですか。解答欄に合うように六十字以内で答えなさい。

問三 傍線部④「おじちゃんとあたしを社交界の名士みたいにしてしまった。」とありますが、どのようなことを表現していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 二人が、みんなから距離を置かれる存在になったということ。

イ 二人が、みんなから尊敬される存在になったということ。

ウ 二人が、みんなからうらやましがられる存在になったということ。

エ 二人が、みんなから煙たがられる存在になったということ。

オ 二人が、みんなから注目される存在になったということ。

問四 傍線部⑤「……メイおばさんのおかげだな」とありますが、クリータスが言っているのはどういうことですか。六十字以内で答えなさい。

問五 傍線部⑥「あたしは、まいった！　って思った。」とありますが、サマーはどうしてそのように思ったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おじちゃんの作る風舞が単なるかざりではなく芸術作品であるということが理解できるクリータスにひきかえ、自分には芸術的なセンスがなく、将来、物書きになるような才能はないと、あきらめの気持ちを抱いたから。

イ サマーがどう言い返そうと、クリータスは言葉につまることもなく、こちらの言いたいことに先回りしてうまく切り返すことができるので、クリータスの頭の回転の良さには到底かなわないと思ったから。

ウ クリータスがおじちゃんの人間性を深く理解していることだけでもすごいと思うのに、それに加えて、サマーの心のうちまで、当の本人も驚くほどの確に指摘してのけたことに、びつくりさせられたから。

エ おばちゃんの死後、サマーはどうしてもおじちゃんの気持ちをなぐさめることができなかったのに、クリータスはほんのわずかな時間で、おじちゃんの気持ちをなぐさめることができるなんてすごいと感じたから。

オ クリータスはサマーのどんな発言も受け止め、そのすべてを肯定してはげましてくれるので、クリータスに冷たくしてきた自分よりも、クリータスのほうが心の広い立派な人間だと思い知ったから。

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|----|--------------|---|------------|---|---------------|
| 1 | 自然をサンビする。 | 2 | 費用をセツパンする。 | 3 | 原案にイゾンはない。 |
| 4 | 港のゼイカンを通る。 | 5 | シユクテキをたおす。 | 6 | シフクのひとときを過ごす。 |
| 7 | 飛行機をソウジュウする。 | 8 | ハタイロが悪い。 | 9 | 用事をスします。 |
| 10 | 具体例をアげる。 | | | | |

評 点

[illegible]

Downloaded from <http://ajphaphysocpharm.sagepub.com> at National Archive Publishing Co on June 11, 2015

Downloaded from <http://ajphaphysocpharm.sagepub.com/> at 11:01 11 November 2014

[illegible][illegible]

--	--

6	1
7	2
8	3
9 ます	4
10 げる	5